

アキール文庫 現代ウルドゥー詩関連文献
——ファイズ、ラーシド、マジード・アムジャド、ミーラージー、
アフタル・シーラーニー——*

ムハンマド・アースィフ**

山根 聡*** (日本語訳・補)

Annotation of Books on Contemporary Urdu Poetry in the Aqeel Collection:

Faiz Ahmad Faiz, N. M. Rashid, Majid Amjad, Miraji, Akhtar Shirani

Muhammad ASIF

YAMANE So (Japanese Translation, Supplement)

This annotation introduces some books on contemporary Urdu poetry, especially the books written on these five important poets in Pakistan such as Faiz Ahmad Faiz (Faiz Ahmad Faiz 1911–89), Nun Mim Rashid (Nun Mim Rashid 1910–75), Majid Amjad (Majid Amjad 1914–74), Miraji (Miraji 1912–49) and Akhtar Shirani (Akhtar Shirani 1905–48). After Muhammad Iqbal (1877–1938), these poets can be called the founders of contemporary Urdu poetry and their work reflects the social transformation of Pakistan. Akhtar Shirani was the most famous Urdu poet of Romanticism in the beginning of the twentieth century. Nun Mim Rashid is called a ‘rebellious poet’ as he wrote a poem about the funeral of God in his early works. Being a symbol of the communist movement in Pakistan, Faiz Ahmad Faiz is the best example of this social reflection in Pakistan as he was arrested in 1950s because of his antigovernment communist activities. Miraji tried to rethink Urdu poetry through the study of contemporary English and French poetry. Apart from those political, social or literary activities by poets, Majid Amjad was writing unique poetry in south Punjab.

The Aqeel Collection of Kyoto University has a rich collection of books of Urdu literature as well as books on history or Sufism in South Asia and these books of Urdu literature consist of classic literature including Dakkani pre-modern, modern and contemporary works that were published in both Pakistan and India. Since poetry is the most famous and popular genre of Urdu literature, this annotation tries to show the books on contemporary Urdu poetry.

アキール文庫には、現代ウルドゥー詩関連の文献も多数所蔵されている。現代詩作品、詩人の生涯やその作風に関する研究書、現代ウルドゥー詩にみられる様々な文学運動に関する研究書などがこれに含まれる。本文庫には、現代ウルドゥー詩の基本文献が網羅的に収蔵されており、中にはきわめて貴重な文献が含まれている。ここでは、現代ウルドゥー詩を代表するファイズ・アフマド・ファイズ(1911–1989)、ヌーン・ミーム・ラーシド(1910–75)、マジード・アムジャド(1914–74)、ミーラージー(1912–49)、アフタル・シーラーニー(1905–48)に関する文献を紹介する。この5人の詩人は、20世紀の現代ウルドゥー詩を牽引してきた人々で、ムハンマド・イクバルののち、この5人の詩人の活動は、そのまま現代ウルドゥー詩の流れを端的に表しており、その作品は高等

* 本稿は、科学研究費プロジェクト「南アジア諸語イスラーム文献の出版・伝播に関する総合的研究」の研究成果の一部である。

** バハウッディーン・ザカリヤ大学(パキスタン・ムルターン)

*** 大阪大学大学院言語文化研究科教授

教育の現場でも教授されている。本稿で取り上げるのは、ファイズ関連の11文献、ラーシド関連の7文献、マジード・アムジャドおよびミーラージーの各2文献、およびアフタル・シーラーニーの1文献である。扱う文献の数に差が生じるのは、アキール文庫自身も、現代ウルドゥー詩のコレクションにおいて、最も多いのがファイズであり、次いでラーシド、マジード・アムジャド、ミーラージー、アフタル・シーラーニーの順に所蔵されているためでもある。ここで取り上げるのは、その豊富な文献の中でも、現代ウルドゥー詩研究を行ううえで基本的かつ重要な文献であると考えられるものである。

Zafar al-Ḥasan, Mirzā (ed.), 1971, *Faiz, Ṣalīṣeṣ Mere Darīce meṣ*. Karachi: Pak Publishers. (AQEEL||C||36||9)

本書は、ファイズが投獄されていた時期の135通の書簡からなるもので、その書簡は、イギリス人妻エリス・ファイズ宛に英語で書かれたもので、本書はそのウルドゥー語訳である。うち数通は娘のチャミーとミロ宛のものも含まれる。本書は、ファイズの友人であったカラーチーの「ガーリブ記念協会」の前所長ミルザー・ザファル＝ハサンが編集した。書簡は、ウルドゥー文学における重要な文学ジャンルの一つとなっているが、本書簡集は、投獄下における精神状況という特殊な環境から、ファイズの生涯や人物像、その思想を理解する上で貴重な資料となっている。

ウルドゥー語訳を刊行するにあたり、ファイズはまずこれら全書簡を再読したうえで自身が簡明な文体に翻訳、ザファル＝ハサンに口述筆記させたうえでファイズが再度確認したのちに刊行された。本書刊行まで、ファイズの作品に関する研究書は出版されていたが、人物像に関しては何も発表されていなかった。本書簡集によって、ファイズの文学観のみならず、これまで知られることのなかった彼の人物像までが明らかになることとなった。このため、ファイズ研究においては、きわめて重要な文献と評価できる。恋愛、美、人生、学究、詩作、革命、時間、孤独、牢獄の苦痛、牢獄における精神状態、獄中生活において書かれた詩の断片、自己愛、自己嫌悪、自己を見つめる姿。不満。獄中生活の様子、文学者や作品に対するファイズの所見、人生観、妻エリスに対する愛情、娘たちの成長を見て感じたことなど、これまで触れられたことのなかったファイズの様々な姿が本書の中に描き出されているのである。

Sahr Ṣiddīqī (ed.), 1989, *Faiz ke Khutūṭ Begam Sarfarāz Iqbāl ke Nām*. Lahore: Māwarā Publishers. (AQEEL||C||36||16)

本書は、パキスタンの有名な女性歌手、ベীগム・サルファラーズ・イクバル(2003年没)とファイズ・アフマド・ファイズの往復書簡集である。ベীগム・サルファラーズは文人のパトロンの存在として知られるが、特にファイズを尊敬していたことで有名であった。そこで本書簡によってファイズの人物像が明らかとなっている。サルファラーズ・イクバルは作家ではなく、歌手であったことから、その書簡の文体は文学的なものではない。サルファラーズ・イクバルが「私がファイズに対して心の中に抱いている敬愛を、この書簡にすべて託した」と述べるように、彼女の書簡にはファイズに対する尊敬、愛情、忠誠といった感情が強く描かれている。それはファイズからサルファラーズに対する書簡のなかにも見られる特徴で、両者が互いに尊敬し、深い愛情を抱いていたことがわかる。「ファイズは慈悲深い友人であり、祖国愛に溢れた人物であった」(サルファラーズ)と述べられるように、書簡によってファイズの人物像の新たな一面がみとめられるのである。

Ashfāq Husain, 1977, *Faiḡ Ek Jā'iza*. Karachi: Idāra-e Yādgar Ghālib. (AQEEL|C|36|24)

本書はファイズ・アフマド・ファイズに関する研究書で、1. ファイズの詩作における文化的、政治的文学的背景、2. 進歩主義作家運動とファイズ、3. 現代ウルドゥー自由詩とファイズ、4. ファイズの詩作における主題と傾向、5. 現代ウルドゥー・ガザルとファイズ、6. ファイズのガザルにおける特徴、に関する論考が掲載されている。本書はカラチ大学において、サイイド・シャー・アリー教授の指導の下で執筆された修士論文であったが、のちに加筆修正のもと刊行された。修士論文ではあるが、論旨は極めて明快で、ファイズ研究においては重要な一冊である。ファイズの作品の背景についての詳述や作品そのものに関する洞察は質の高いもので、本書以前にファイズ研究ではこのような研究書はなかった。今日においても、ファイズ研究におけるすぐれた著作と位置づけられる。

Ayūb Mirzā, 1977, *Ham ke Ṭahre 'Ajnabī*. Lahore: Printers Maṭba' al-Kitāb. (AQEEL|C|36|12)

本書は、ファイズの友人であったアユーブ・ミルザーによるファイズとの交友録である。アユーブ・ミルザーによるファイズとの面会や会話等のさまざまな思い出について書かれた原稿を、ファイズ自身が確認し、ファイズ自身によって加筆された著作であるため、ファイズ研究、特にファイズの人物像や思想を知るうえで基本文献の一つと評価されている。交友録であるが故、ファイズとの様々な時、場所での会話が採録されたために、本書を通しての時間的系列は前後している場合があるものの、ファイズの作品や人物像を知る上で貴重である。なお、本書の文体は会話体で書かれており、これが本書全体を興味深いものに仕上げている。

Ayūb Mirzā, 2003, *Faiḡ Nāma*. Lahore: Classic. (AQEEL|C|36|13)

ファイズの生涯に起こった出来事や人物像、文学的技法に関する、(AQEEL|C|36|12)に次ぐアユーブ・ミルザーの著書である。前著に続き、ファイズに関する深い考察を進めるために、本書執筆の目的でロンドンからパキスタンに戻り、ファイズの出身地であるスィヤールコート、ファイズが育ったラーホール、イスラマバードや他の町を廻り、ファイズの友人、知人らからインタビューを取り、関連諸機関から文書を入手した。1951年、左翼系知識人や軍人による国家転覆罪で逮捕された「ラーワルピンディー疑獄事件」の際の公判の冒頭陳述の記録など、多くの文書のウルドゥー語訳を行わせたうえで、著者による考察を加えている。さらにファイズの生涯や詩作におけるあらゆる背景となる出来事を、著者自身の記憶とともに記している。前著に続き、ファイズの傍にいた人物による記録と考察は、ファイズ研究にとって欠かせない文献である。

'Abd Allāh Malik, 1982, *Lā'o to Qatal Nāma Merā: Ek Tajziya, Ek Nadhrāna*. Lahore: Kothar Publishers. (AQEEL|C|36|11)

著者のアブドゥッラー・マリクはジャーナリストで、ファイズの親友でもあり、ファイズとともに投獄された経験を持つ。本書には、ムハンマド・アリー・スィッディーキーやアミン・ムガルらの文章や、ファイズの書簡、論考などを通して、ファイズの人物像や思想を明らかにしようと試みている。著者は、ファイズの人生観、政治、文学、文化、ジャーナリズム、労働組合、農業組合や人々の苦悩に対するファイズの関心を描き出している。また、著者の娘や友人に宛てた書簡も掲載し、その中でファイズに対する見解も含まれている。さらに出版時までのファイズの最新の詩作や、ファイズの写真など、ファイズの友人による、ファイズに対する思いを寄せた著作であり、

ファイズ研究のなかでも独特な文献である。

Abu Sa'īd Qureshī, 1986, *Faiẓān-e Faiẓ: Faiẓ Shanāsī kī Ek Na-tamām sī Koshsh*. Karachi: Maktaba-e Aslūb. (AQEEL|C|36||22)

本書はファイズを敬愛する人物による典型となる著作である。本書には一切の章立てがなく、著者がファイズについてただひたすら書き並べた構成となっている。本書執筆にあたり、著者は参考文献の他に、自身の記憶を織り交ぜているが、先行研究はあまり利用せず、ファイズの詩作を理解することを目的に著述した内容となっている。したがって従来の研究書とは一線を画すが、その特徴は文体にも及んでおり、文学的な会話風の文体で進むことで読者の関心を引くようになっている。また随所に詩的な、甘美な表現が用いられている。本書はファイズを敬愛する人物による、ファイズの人物像や詩作の世界を描いたものであるが、これ自身が、一つの文芸作品になっているともいえよう。

Tāhīr Tonsvī (ed.), 1989, *Faiẓ kī Takhlīqī Shakhsīyat: Tanqīdī Muṭal'a*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL|C|36||17)

本書はファイズ研究論集であるが、編集方針として、パキスタンの高等教育機関で教授される現代ウルドゥー詩人ファイズとしての文学的位置づけについて明らかにするうえで有益と思われる論文17本を集めている。したがって、本書にはファイズ研究において基本的な論考が集められている。大学院レベルの学生がファイズを研究するにあたって、本書はまず読まなければならない書籍であるといえる。また本書には、ファイズに関するインタビュー6本も掲載されている。これら収載された論文やインタビューは、学習的意義のみならず、研究としても一級のものを集めており、ファイズ研究では欠かせない文献となっている。

論文は、現代を代表するウルドゥー短編作家アフマド・ナディーム・カースミー、インドの批評家カリームッディーン・アフマド、ムムターズ・フサイン、アルシュ・スイッディーキー、インドの風刺作家ムジュタバー・フサイン、インドの文学研究者アブドゥル・ムグニー、ムハンマド・アリー・スイッディーキー、ラーホールのガヴァメント・カレッジの元教授で『簡明版ウルドゥー文学史』の著者でもあるサリーム・アフタル、アティーク・アフマド、アキール文庫のムーヌッディーン・アキール、ムルターンのパハーウッドイウン・ザカリヤー大学の教授で元パキスタン国立国語アカデミー会長のアヌワール・アフマドなどの論文が掲載されている。

'Atīq Aḥmad, 1991, *Faiẓ: 'Aḥad aur Shā'irī*. Lahore: Makatab-e 'Āliya. (AQEEL|C|36||20)

本書は、そのタイトルから明らかのように、ファイズの人物像と詩作を、彼の時代に照射して考察している著作である。内容は、ファイズの不屈の闘志、勇気とともに、冷静で穏やかな人柄の内面にある創造に対する炎を理解しようとするものである。彼の内面に沸き起こる感情は、彼の個人的生活の体験のなかで生まれたものではなく、彼の過ごした時代が冷戦の只中にあり、その緊張関係の中で起こった左翼運動の興隆と弾圧などを経験したため起こったものであった。ファイズはこうした同時代の流れと深く関わり、高度に知的な視点から観察していたのである。ファイズは実生活のあらゆる問題に直面しながら、その痛みや苦しみ、絶望によって、独自の詩的空間を拓き、創り出すことになったのである。

本書は、ファイズの人物像を世界的潮流の中に見出し、ファイズの生きた時代を読者の眼前に描

き出そうとしている。読者は、本書に書かれた広い視点でファイズを理解することとなり、ファイズの革命的情熱が、その温厚な人格の中にあることを、著者は「うわべは花が咲き、中では炎が燃え盛る」と評した。本書は、ファイズに関する詳細な考察を、歴史的、文学的な視点で、きわめて主観的に行ったもので、ファイズに関する研究書の中で最良の文献の一つに数えることが出来る。

Faḥ Muḥammad Malik, 1994, *Shā'iri aur Siyāsati*. Lahore: Sang-e Meel Publications. (AQEEL||C||36||19)

本書は、パキスタン国立国語アカデミー会長を歴任した著者がドイツ・ハイデルベルグに滞在中に記した著作で、ファイズ・アフマド・ファイズの詩的、政治的思想を理解しようと試みたものである。ファイズの人物像や詩作、散文作品、語録について、その思想や創造性を論じているが、著者自身がファイズと交流を持っていたことから、自身の経験をふまえてファイズ像を描いている。

著者はファイズを、卓越した詩人としてのみならず、パキスタンの英雄と位置づけている。著者によれば、ファイズはパキスタンが他国からの干渉を受けない、本当の意味での完全に独立した国家となるような革命を起こすことを夢見ていたとし、ファイズ自身が、20世紀初めのウルドゥー詩人ハスラト・モーハーニー (1875-1951) 同様の社会主義者であったと位置づけている。その一方で、ファイズ自身の性格はスーフィーのように私生活に対しては無欲であったとし、「社会主義者ムスリム」としている。著者の独自の視点からのファイズ観による本書は、ファイズ研究の中でもその思想的側面を考察する上で重要であろう。

Birjīs Bāno, Saiyida, 2000, *Faiz Ahmad Faiz ki Urdū Ṣahāfat*. Karachi: Pakistan Study Center, Karachi University. (AQEEL||C||36||13)

ファイズ・アフマド・ファイズはパキスタン独立後、ジャーナリズムの世界に身を投じていた。進歩主義新聞協会 (Progressive Papers Limited) が発刊していた英字紙『パキスタン・タイムズ *Pakistan Times*』やウルドゥー語紙 *Imroz* 等の編集長を務めていた。また、レバノンで発行されていた文芸誌『ルイス *Louis*』の編集委員の一人として名を連ねていた。さらに、ラーホールから刊行されている文芸誌『軽妙なる文芸 *Adab-e Laṭīf*』の編集にも携わっていたことでも知られている。こうしたファイズの活動にも、常に彼の詩作が深く関わっていたことは言うまでもない。強い探求心もまた、彼の詩作のみに限定されたものではなかった。したがって、ファイズの全体像を知るうえで、彼のあらゆる活動に関し、詳細な検討をしなければならないのは当然のことであろう。それによって、ファイズの文学的、創造的な人物像は明らかにならないのである。

本書は、ファイズのジャーナリズム、特にウルドゥー・ジャーナリズムにおける活動にのみ焦点を当てた研究書である。本書は2部で構成され、第1部は5章に分けられ、まずはウルドゥー・ジャーナリズムの歴史と発展、ファイズの進歩主義新聞協会への関わり、ファイズのジャーナリズムへの本格的参加、パキスタンのジャーナリズムにおけるファイズの位置、文学としてのジャーナリズムにおけるファイズ、ヤヒヤー・ハーン軍事政権期におけるファイズの新新聞論説などが論じられている。第2部にはファイズによる論説の一部が収載されており、これによってファイズのジャーナリストとしての特徴、その文体やテーマの特色などが考察されている。したがって本書は、ジャーナリストとしてのファイズ像を考察するのみならず、ファイズの同時代のパキスタンのジャーナリズムを知る手掛かりとなる文献である。

Jamīl Jālbī (ed.), 1986, *Nūn Mīm Rāshid- Ek Muṭāla'*. Karachi: Maktaba-e Aslūb. (AQEEL||C||15||10)

ウルドゥー文学の著名な研究者で批評家、文学史研究家、学者、作家である著者ジャミール・ジャールビーは、現代ウルドゥー詩人ヌーン・ミーム・ラーシドと極めて親しい関係にあった。ラーシドの没年(1975年)の後、パキスタンでラーシド追悼特集を組んだのは唯一、ジャミール・ジャールビーが編集していたカラーチャーの文芸誌『新時代 *Nayā Daur*』であり、ラーシド特集号は1978年に刊行された。それは、ラーシドがその詩作において神への反抗を描いた内容の詩を書いたり、遺言で火葬を希望し、その通りに実践されたことが、パキスタン社会において様々な反響を生んだためであった。本書は、『新時代』のラーシド特集号に掲載された重要な論考のみならず、過去半世紀にわたって書かれ、さまざまな雑誌等に掲載されてきたラーシドに関する論文等の中から選りすぐりのものを集めて編集、刊行したものである。本書はラーシドに関する最初の研究書であり、ラーシドの人物像や作品について、広く扱った著作となっている。したがって本書は、ラーシド研究において最も基本的な文献である。本書によってラーシドの人物像についてこれまで知られていなかったさまざまな側面が明らかとなっている点でも、重要である。

本書刊行後、ラーシドに関する研究書は数多く刊行されているが、それらのすべてが本書を参考にしていることから、本書の重要性が現在もなお失われていないことが明らかである。本書に掲載されている論考の筆者の多くは、ラーシドと親交のあった文人が多く、詩人ミーラージー、評論家ハサン・アスカリー、ジャミール・ジャールビー、アリー・ジャワード・ザイディー、ムムターズ・フサイン、サーキー・ファールキー、アーガー・アブドゥル＝マジード、ファイズ・アフマド・ファイズ、アフターブ・アフマド、サリーム・アフマド、アズィーズ・アフマド、ワーリス・アラヴィー、ワズィール・アーガーなどが名を連ねている。すなわち、現代ウルドゥー文学における代表的な批評家の著述家ここに集められているといっても過言ではない。

Tabassum Kāshmirī, 1994, *Lā-Musāvī Rāshid*. Lahore: Nigārshāt. (AQEEL||C||15||9)

本書はラーシドの詩作研究である。著者タバッサム・カーシュミーリーはウルドゥー文学研究者としても知られる一方で、ラーシドの影響を強く受けた詩人でもある。本書は、ラーシドの詩作の歴史を時代で区切り、その思想的変遷や詩作に用いられる象徴、隠喩について研究した著作である。また本書にはラーシドに関する過去50年にわたる研究論文等に関する考察も含まれている。本書は11の論文から構成されていて、ラーシドの無意識なまま描かれる文化観、悲観と楽観の相克とそれに対する答え、ラーシドとイメージに対する恐怖、ラーシドの詩作にみる象徴、「火」の文化的象徴性とラーシド、ラーシドと象徴としての都市、ラーシド研究の50年など、現代的文脈でラーシドの詩作と詩想を研究している。本書は、ラーシド研究における新たな展開を示したといえる。

Fath Muḥammad Malik, 2010, *Nūn Mīm Rāshid Siyāsāt aur Shā'irī*. Lahore: Dost Publications. (AQEEL||C||15||12)

本書は、ラーシド生誕100年を記念して刊行された。本書はラーシドの政治性や思想的側面に焦点を当てて書かれた著作である。著者が示すように、ラーシドの政治信条や思想は、詩作という衣を着て如実に表れている。ラーシドの政治性や思想に関する指摘は、タバッサム・カーシュミーリーによる研究書(AQEEL||C||15||9)で論じられている点を本書の著者も言及しているが、著者はさらに、従来のラーシド研究が、ラーシドの詩作に対する正当な評価を下しているものの、その思想の特徴、美点については研究が進んでいないとし、文学性の評価というヴェールをはぎ取り、彼の

政治性や思想についてさらに研究する必要があると述べている。そこでは、ラーシドの詩作が革命的な政治性を帯びていて、政治的隷属が文化的、社会的、精神的に影響を与えている実態を深く探求したうえで描いているという。ラーシドの詩作は、難解な隠喩や文体、ペルシア語を多用した複雑な語彙などで知られているが、著者はこれらが単なる言葉遊びではなく、読者の思想を活性化させるうえでの効果的な手段であると指摘している。著者は長年ウルドゥー文学研究に携わりながら、文人たちと交流してきたが、こうした経験からも、ラーシドの詩作に対する新たな側面を見出そうとしているものと思われる。

Fakhar al-Ḥaq Nūrī, 2010, *Muṭāla‘-e Rāshid, Cand Na‘e Zāvi‘e*. Faisalabad: Mithal Publishers. (AQEEL||C||15||6)

本書は、ラーシドの人物像と詩作に関する12の研究論文によって構成されている。その内容は、ラーシドのガヴァメント・カレッジ(ラーイルプール、現ファイサラーバード)の学生時代、パキスタン独立時の政治運動であるハークサル運動へのラーシドのかかわり、ラーシドの自由詩、ラーシドによる翻訳、ラーシドのガザル(恋愛抒情詩)、ソネットの技巧、散文詩、思索の変遷、古典詩人ガーリブの理解者としてのラーシド、イランにおけるムハンマド・イクバル研究の初期におけるラーシドなど、本書はラーシドに関するあらゆる側面について研究と考察が行われている。著者はパンジャブ大学オリエンタル・カレッジの元ウルドゥー文学研究科長で、2005年から2年間に、大阪外国語大学で教鞭を執った経歴も有する研究者で、ラーシド研究で博士号を取得している。本書は、ラーシドの生誕100年を記念して発刊されたものであるが、本書におけるラーシドの学生時代やハークサル運動との関係は、これまで明らかにされていなかった事実関係を紹介しており、ラーシド研究にとって重要な情報を提供している。

Taḥsīn Firāqī, 2010, *Ḥasan Kūza Gar*. Lahore: Sho‘ba-e Urdū, Oriental College, University of the Punjab. (AQEEL||C||15||12)

本書はラーシドの生誕100年を記念して刊行された研究書で、5点の論文で構成されている。著者はパンジャブ大学オリエンタル・カレッジのウルドゥー文学研究科長を歴任した研究者である。書名同様、論文の題名もラーシドの詩作の一部が用いられている。「どの虹からわたしの色が生まれたが、彼らは知る由もない」という題目の論考では、ラーシドの思想に関する詳細な分析を行っており、特にムハンマド・イクバルの詩作のラーシドへの影響や、ラーシドのアッラーに対するイメージを明らかにしようとした。ラーシドは青年期に「神の葬列」という詩を書いて文壇に衝撃を与え、神の存在を否定すると批判を受けたが、本論文では、表層的なラーシド批判に陥らず、ラーシドの内面にある神の概念を解き明かそうとしている。ほかにも、1967年から1974年までのラーシドのイラン滞在時代の詳細においては、ラーシドによる自作の詩のペルシア語訳原稿や、ラーシドとイランの文人との交流の詳細の記録、ラーシドの書簡などを掲載している。こうしたラーシドのイラン時代の資料の調査研究は、著者がテヘラン大学でウルドゥー語の教授を行っていた時代に行われたものである。したがって、本書は、ラーシドのイラン滞在期の考察を中心にまとめられている。ラーシドはペルシア語彙をふんだんに詩作に用いることでも知られており、ラーシドのペルシア文学観や、イラン人がラーシドをどう見ていたかが明らかとなり、ラーシドの詩想を探求する上で重要な文献となっている。

Ziyā al-Hasan, 2008, *Nūn Mīm Rāshid Shakhṣiyat aur Fan*. Islamabad: Academy Adabiyāt Pakistan. (AQEEL||C||15||15)

本書は、パキスタン国立文学アカデミーのプロジェクトで文人の人物像や作品に関する概説する「パキスタン文学の立役者たち」シリーズの一環として刊行された。本書はラーシドの人物像や作品についての基本情報を知ることのできる最良の図書である。150 ページの著作において、ラーシドの全容を描いた本書は、特に作品研究において、文学研究の最先端の潮流に基づいて議論しており、現代ウルドゥー文学研究であり浸透していない分析方法の提示は、ウルドゥー文学研究そのものに大きな貢献をなしている。著者はパンジャブ大学オリエンタル・カレッジのウルドゥー文学研究科で教鞭を執っており、現代ウルドゥー詩研究、批評を行っている気鋭の研究者であることから、本書は、文学研究の手法についても新たな視点を提示してくれる。

Majīd Amjad, 1958, *Shab-e Rafta (Nazmen, Ghazlen)*. Lahore: Nayā Idāra. (AQEEL||C||6||9)

現代ウルドゥー詩の代表的詩人、マジード・アムジャド (1914-1974) による第一詩集の初版である。1958 年、マジード・アムジャドはそれまでの自作の詩の中から詩集に入れるべき作品を自ら選んで刊行させた。マジード・アムジャドの詩作については、パンジャブ大学オリエンタル・カレッジのウルドゥー文学研究長を歴任したハージャ・ムハンマド・ザカリヤー教授が編纂した『マジード・アムジャド全集』が、全作品を収載しており、同全集がマジード・アムジャドの作品を鑑賞する上では十分であるが、マジード・アムジャドが文壇で名声を得たのはこの第一詩集に含まれた詩作によってであり、「パーン屋」「孤独な病葉」「詩人」「別れの朝」「神」「小路の灯火」「ノックの音」「遠くの木々」「竈」「雨のあと」「このごろ」「新時代」「(現代ウルドゥー小説家) マントー」「人生、嗚呼、人生」「自署」「バス停にて」などは、現代ウルドゥー文学におけるマジード・アムジャドの高い文学性を決定づけた作品群である。本書刊行には、文人で政治家でもあったハニーフ・ラーメーが携わり、最初のページの詩は、マジード・アムジャドが 1958 年にモンゴメリー (現サーヒーワール) 市で自身が書いたものがそのまま掲載されている。本詩集は、詩人自らが選んだ作品で構成された記念すべきものであり、現在では入手はほとんど不可能である。全集があるとはいえ、本書はウルドゥー文学史上記念すべき刊行物として、本書自体が意義を持っている。

Mīrājī, 1944, *Is Nazm men*. Delhi: Saqī Book Depo. (AQEEL||C||46||1)

本書は、現代ウルドゥー詩を代表するミーラージー (1912-49) が、1939 年に、ラーホールから刊行されていた文芸誌『軽妙な文芸 *Adab-e Latīf*』の編集長を務めていた時期、毎月様々な詩人の自由詩に関する批評を書いていたところ、これらをまとめて刊行させたものである。しかがって本書は、この時代の記念碑的な作品であり、本文庫に所蔵されているのはその初版である。本書においてミーラージーはフランスの詩人マラルメの詩作の技法について論じており、彼自身がその作風に影響を受けていることを認めている。こうした実態は、20 世紀前半のウルドゥー文学における外国文学とのかかわりを知るうえで大きな意義がある。ミーラージーは文人団体「ハルカエ・アルバーベ・ザウク *Halqa-e Arbāb-e Dhauq*」で活発な活動を行っていたことでも知られている。

ウルドゥー文学史において、心理学的な文学批評は 19 世紀末の小説家ミルザー・ハーディー・ルスワーによって開始されたが、それを展開させ、定着させたのがほかならぬミーラージーであった。ミーラージーの文学批評は心理学的な視点によるものであるが、その内容は偏向のないものである。ミーラージーは西洋の思想の影響を受けながらも、批評においては東西の文化的差異の観点

から論じようとしている。批評はまず作品を提示し、その後批評を続けている。そこでは作品とともに、作家の心理面の考察も展開させている。その批評は作品の解釈を目的として書かれたために、文体は自身の詩作と違って簡明である。現代ウルドゥー文学の心理学的文学批評の多くは難解な文体と専門用語を駆使したものであるが、ミラージーの批評はきわめて簡潔な文体で書かれている。本書で扱われている作家は、アフマド・ナディーム・カースミー、アフタル・シーラーニー、ジョーシュ・マリーハーバーディー、ローシャン・ディーン・タンヴィール、サイド・アフマド・エジャーズ、サラーム・マチリー・シャハリ、シャード・アールフィー、アービド・アリー・アービド、アブドゥル・マジド・アダム、ファズル・フサイン・カイク、ファイズ・アフマド・ファイズ、カユーム・ナザル、M.D. タースィール、ムフタル・スイッディーキー、マフムード・ジャーランダリー、マスウード・アリー・ザウキー、マクブール・フサイン・アフマドプーリー、ヌーン・ミーム・ラーシド、ユースフ・ザファルなどである。本書によって、現代ウルドゥー文学のある時代が鮮やかに描き出されており、それぞれの作品の鑑賞のみならず、文学史全体にとっても貴重な情報を与えるものである。さらに、ミラージーの文芸批評に対する意識や、彼自身が同時代の作家や作品をどのように見ていたのかもわかる。心理学的な文学批評のあり方の理解にとっても重要な文献であろう。その初版がこうして文庫に所蔵されていることは、本文庫の重要性を示している。

Rashīd Amjad, 2010, *Mīrājī Shakhṣiyat aur Fan*. Faisalabad: Mithal Publishers. (AQEEL||C||46||4)

本書は、現在イスラマバードの国立現代語研究大学ウルドゥー文学研究科長で短編作家でもあるラシード・アムジャド教授による博士論文が刊行されたものである。パキスタンの国立文学アカデミーによる「パキスタン文学の立役者」シリーズの一環で2006年に初版が刊行された。アキール文庫にはその初版も所蔵されている (AQEEL||C||46||5)。本書はそれを加筆して刊行させた第3版である。本シリーズ刊行の目的は作家の人物像や作品に関する概説であるが、本書にはミラージーの家族、生涯、人物像、ミラージーの著作リスト、ミラージーの自由詩、歌謡、翻訳、批評などすべての側面が考察されている。本書では、1857年のインド大反乱以降の英領期におけるミラージーの文学観、批評精神などがその散文、韻文作品を通して論じられ、さながらミラージーを通して、英領期のインドの知識人の精神構造を丁寧に解き明かそうとしている。

しかも、簡明な文体で短編を書くことで知られる著者ラシード・アムジャドは、本書においてもきわめて簡潔な文体で書くことを心がけており、本書がミラージー研究における基本文献であるといえよう。

Yūsuf Ḥasnī, 1976, *Akhtar Shīrānī aur Jadīd Urdū Adab*. Karachi: Anjuman Taraqqī Urdū. (AQEEL||C||3||5)

著者ユースフ・ハスニーはカラーチーのガヴァメント・カレッジ・ウルドゥー文学研究科で教鞭を執っていた研究者で、本書は同人の博士号請求論文として提出された、20世紀初めのロマン主義詩人、アフタル・シーラーニーに関する研究書である。本書ではアフタル・シーラーニーの生涯、著作、アフタルの時代背景、アフタルのロマン主義詩、詩作の別の側面、アフタルの短編小説や会話表現、ジャーナリズムにおける作品、文学技巧、そして現代ウルドゥー文学におけるアフタル・シーラーニーの位置についてそれぞれ考察されている。特にアフタルの生涯に関しては、一次資料をつぶさに集め、詳細な分析を行っている。本書は、アフタルに関する研究書の中で群を抜いており、アフタル研究のみならず、現代ウルドゥー文学におけるロマン主義文学運動を知ろううえでも貴重な手がかりとなる。本書によって、アフタルのロマン主義文学運動の活性化を目

指した非凡な努力と才能が明らかになるだけでなく、彼の関心が詩作のみならず、短編小説や言語学、政治にも深い関心を寄せていたことが明らかとなる。この点で、本書はアフタル研究の基本文献であるといえる。

アキール文庫 現代ウルドゥー詩関連文献——ファイズ、ラーシド、マジード・アムジャド、ミーラージー、アフタル・シーラーニー——

正誤表

p. 173, l. 8	AQEEL C 36 9	→	AQEEL C 036 9
p. 173, l. 25	AQEEL C 36 16	→	AQEEL C 036 16
p. 174, l. 1	AQEEL C 36 24	→	AQEEL C 036 24
p. 174, l. 11	AQEEL C 36 12	→	AQEEL C 036 12
p. 174, l. 19	AQEEL C 36 13	→	AQEEL C 036 14
p. 174, l. 30	AQEEL C 36 11	→	AQEEL C 036 11
p. 175, l. 3	AQEEL C 36 22	→	AQEEL C 036 22
p. 175, l. 13	AQEEL C 36 17	→	AQEEL C 036 17
p. 175, l. 28	AQEEL C 36 20	→	AQEEL C 036 20
p. 176, l. 5	AQEEL C 36 19	→	AQEEL C 036 19
p. 176, l. 18	AQEEL C 36 13	→	AQEEL C 036 13
p. 176, l. 37	AQEEL C 15 10	→	AQEEL C 015 10
p. 177, l. 21	AQEEL C 15 9	→	AQEEL C 015 9
p. 177, l. 31	AQEEL C 15 12	→	AQEEL C 015 12
p. 178, l. 8	AQEEL C 15 6	→	AQEEL C 015 6
p. 178, l. 22	AQEEL C 15 12	→	AQEEL C 015 11
p. 179, l. 1	AQEEL C 15 15	→	AQEEL C 015 15
p. 179, l. 11	AQEEL C 6 9	→	AQEEL C 006 9
p. 179, l. 26	AQEEL C 46 1	→	AQEEL C 046 1
p. 180, l. 16	AQEEL C 46 4	→	AQEEL C 046 4
p. 180, l. 20	AQEEL C 46 5	→	AQEEL C 046 5
p. 180, l. 29	AQEEL C 3 5	→	AQEEL C 003 51